

CONTENTS

文化の交差点 青木 保・文化庁長官対談 第20回 ゲスト 本保芳明さん●観光庁長官	
自文化と向き合い、異文化に旅する	4
長官コラム 青木保のカフェ・アオキ	8
特集 「生活者としての外国人」に対する日本語教育の昨日・今日・明日	
寄稿	
外国人を取り巻く情勢と日本語教育	平高史也・12
資料	
日本語教育参考データ	文化部国語課・14
事業紹介	
「生活者としての外国人」のための日本語教育事業	文化部国語課・15
事業報告	
外国人と日本人、心が通う日本語教育	堀 永乃・16
寄稿	
「生活者としての外国人」に対する日本語教育のこれから	西原鈴子・18
報告	
「国語分科会日本語教育小委員会における審議について」の概要	文化部国語課・20

連 載	
いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート 84	
佐賀県立佐賀城本丸歴史館	24
芸術文化の風 最終回	
道具帳（阿部俊夫）	25
著作権Q&A 『著作権なるほど質問箱』から 最終回	
各種サービスと著作権②	26
暮らしの中の言葉 最終回	
半世紀に渡る調査研究からみた言語生活	27
伝達地区を見守る人々 伝達歳時記 60	
伝達制度充実に向けての取組	28
広げよう「文化力」の輪！ 最終回	
「関西文化の日」を開催	30
こどもの文化体験 24	
命の大切さを子どもたちに伝えた上映会（山口県柳井市）	31
日本の伝統美と技を守る人々 重要無形文化財保持者編 28	
前 史雄（沈金）	32
国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法 文化財鑑賞の手引き 最終回	
地形模型	33
祭り歳時記 伝承を支える人々 36	
設案のシカウチ行事（愛知県東栄町）	34
文化交流使の活動報告 52	
ソウルでの文化交流使活動（常盤津三味線／常盤津文字兵衛）	35
新進芸術家在外研修体験談 最終回	
3人の先生たち（指揮者／下野竜也）	36

文化庁ニュース	37
イベント案内	40
新国立劇場スポットライト	45
4月の国立劇場	46
芸術文化振興基金ニュース	47
題字デザイン 桑山弥三郎	
今月の表紙 潮江天満宮の飛龍梅（高知市） 撮影：岩崎 明	



自文化と向き合い、 異文化に旅する

青木 カフェ・アオキ、今回は、昨年一〇月に新しくできました観光庁の初代長官、本保芳明さんにお越しいただきました。観光についていろいろとお話をうかがいたいと思います。

私自身観光庁の発足前、昨年に、関連する委員会に参加したこともありまして、以前から観光というのはいかに重要だと思ってきたのですが、日本では比較的観光の重要性についての認識が浅い感じがするんです。例えばフランスに行くくと、観光というのは一種の基幹産業に位置づけられていて、国家の収入にとっても、地域の振興にとっても、大きな意味をもっています。

日本ではあつうどこか旅行へ行こうというときに、「観光です」というと、〈遊びに行くのか〉ということになって。何だかなくてもいいことをするような気分にさせられる。実は旅や観光には人間の営みにおいて重要なものが含まれている気がします。

近年、日本も「観光立国の実現」と言っておりますが、そこです、おうかがいしたいのは「観光立国」ということにはどういうねらいがあるのでしょうか。

か。

本保 「文化立国」という言葉と同じだと思いますが、文化とか、観光を一つの基軸にして国づくりをしていこうということだろうと思います。例えば国際理解の増進とか、あるいは豊かな生活など、観光はいろんな面で役立つと皆さんもわかっていっていると思います。しかし、どうして急に観光庁ができたか、「観光立国」といわれるようになったかということについては、わかりにくいところがあると思います。その辺について、後で少しお話できればと思います。

ところで、日本の国際化のレベルについて、皆様どう思われているのでしょうか。実は、主要国の国民一人当たりの海外旅行者数と外国人旅行者の受入数を合計した数値を国際交流度と考えると、日本は先進国で最低のほうなんです。一〇〇人当たりの数字で申し上げますと、日本の国際交流度は二〇人弱になります。一番多いイギリスが、約一七〇人。近くの韓国は倍以上、台湾は三倍以上。また、アメリカ、ロシアも倍ぐらいです。世界的に見ると、日本人は国際的な関心度が非常に高く、知的レベルも高い国民だと

思いますが、実際に外国とふれあっている割合となると、このように極めて低いのです。

つまり、本当の意味での国際的接触はまだまだ十分ではないということなのです。観光立国を推進し、国際観光を通じて人的交流が必要とされる理由がわかりただけだと思います。

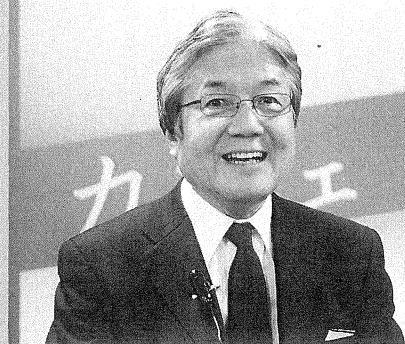
青木 日本を訪れる外国人観光客の人数は世界で何位ぐらいですか。

本保 UNWTO（世界観光機関）が出している統計だと今は二八位です。このように出入国、私どもでは「アウトバウンド」と「インバウンド」と称していますが、これがともに低いのが現状です。日本は人材はいますが、資源がなく、国際政治的にも弱い国ですから、国際社会の中で上手に生きていかなければいけない国です。そのためには、世界とのふれあいが大事になるのですが、実はそれが非常に乏しいのが実情です。

また、三大都市圏と地方と比べるとずいぶん差があります。来ている外国人の七割は三大都市圏へ行っておしまいです。そうすると地方は国際化が進んでいかないという問題があります。

*今回の対談は、1月15日に霞が関から文化カプロジェクトのトークイベント「カフェ・アオキ」として行われたものです。

人とのふれあいや、ライフスタイルとのふれあいにあると思うのです。そういう面では、日本は非常におもしろいところだと思っています。中国はまだまだ貧富の差が激しくて、トータルで見れば、歴史はあっても、庶民の生活という側面では日本のほうがおもしろいと思っておりますので、中国とは十二分に競争ができる



非常に豊かな農村風景が展開していて、念ながら重視もされてこなかったし、十二分に発達もしていないのが現状ではないでしょうか。

青木 さまざまな方たちで移動するということは、人類がずっとやってきたことですからね。また、日常を離れて別の見知らぬ場所を訪れる。楽しみかつこれまで知らなかったことを実地に体験する。精神と身体のリフレッシュとなる。これは現代人にとっては必要不可欠といってもよいことではないでしょうか。おっしゃるとおりそういうところから観光行政を発展させるというのは一番大事だと思います。

ところで観光産業は、日本ではどういうかたちで存在するのでしょうか。

本保 関連する産業がたくさんあります。目に見えないところで深く関係しているのは、農林水産業、特に農業だと思っています。フランスの景観、特に自然景観は非常に豊かで、美しいですね。あれは農業政策がうまくいっていることで、緑が保存活用されている。それが景観形成の基本になっていると思います。

日本も実はかつてそうだったのです。

に手をつけて、外国人を呼び込む施策をやっているとなさっているのでしょうか。

本保 日本は民間の活力が競争相手である韓国や中国に比べて高いと思います。日本の文化に対する国際的関心も高まってきています。

韓国の観光当局者と話をすると、「日本がうらやましい。自分のところは本来に観光資源が乏しいから、たいへんなんだ」という話が出ます。少し日本が有利な位置にいるかもしれません。

しかし、中国は歴史的な背景、文化的な奥行きを含めて、たいへん潜在的な魅力をもっている、これからたぶん世界一の観光国になる可能性をもっており、たいへんな競争相手です。

思っています。

文化と観光

青木 ところで本保長官は観光そのものの役割や力についてどのようにお考えですか。

本保 観光がもっている力は、何よりも人の生活を豊かにし、文化も含めて日本の良さを発見したり、あるいはそれを発信していったりしていく力であり、こうした力をもつ産業はほかにはないのではないかと思います。観光は、極めて人間的な産業だと思います。それが日本では残

ほんぼ・よしあき 北海道出身。昭和24年生まれ。

東京工業大学大学院修了後、運輸省（当時）に入省。日本郵政公社理事・専務執行役員、国土交通省総合政策局観光政策審議官などを経て、平成20年10月に発足した観光庁の初代長官に就任。訪日外国人旅行者数を平成22年までに1000万人にし、将来的には日本人の海外旅行者数と同程度にする、日本人の海外旅行者数を平成22年までに2000万人することなどを目標として、観光立国を目指した施策の舵取りを行っている。



青木 日本は全国的に多くの魅力的な場所があるのに、観光全般にとってなかなかそうはいかないということですか。

本保 日本は観光という観点で見ると、いろいろな面で遅れていて、このままだと日本の将来を考えたときに、非常に暗くなります。

欧米もアジアの国も、外国人の観光客を呼んで、自国を知ってもらい、またお金を落としてもらうことに力を入れているのですが、日本はそういう努力の痕跡が見られなかった。そんな国は世界で唯一日本だけなのではないかと思っています。

その理由はたくさんあると思います。一つは、日本は戦後、工業を中心に産業立国が非常にうまくいってきた。そういう中で、別に観光収入で食わなかったってやっていったし、むしろ資源は工業に向けたほうが効率的だったという要素があると思います。

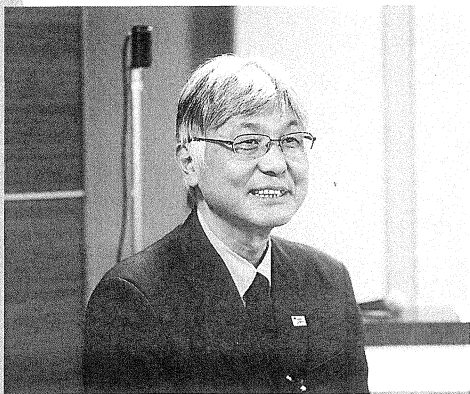
もう一つには、世界的に見て国内観光が最も活発な国の一つであるため、国際観光に力が入らなかつたためだと思います。裏返すと、それだけ日本国内は魅力に満ちているということではないかと思っています。

青木 国内での人の移動は、観光目的でもないへん多いということですが、日本の観光は外国との関係が非常に薄いということでしょうか。

本保 そうです。そうした状況において、なぜ観光の盛り上がりがあるかといえば、日本の経済社会が人口減の社会に入ってきているからだと思っています。そうすると、例えば二〇〇五年と一五年先の二〇二〇年を比較すると、東京はプロックでいくと唯一勝ち組で、定住人口が二・一％増えるのですが、ほかの地域では大きく減少し一〇％近く落ち込む地域もあります。そうすると、地方は、極論するとお年寄りばかりで閑散とした状態となりさびれてしまうのです。この状態から脱するためには、外から人に来てもらって、それでにぎやかにならなければいけないし、お金も落としてもらわなければいけない。

青木 観光資源はいろいろなところに散らばっていますから、それをうまく開発すれば、地域振興のよい手段になるし、外国人も含めて人々を呼び込むことができるでしょう。

観光庁としてこれからどういうところ



が勝手にできない。市の文化課の職員が来て、指定業者を示して、アパルトマンの枠もほかと文化的な整合性をもつようなものに直さなくてはいけないとか、細かいことまで規制があるといわれます。文化的な規制は非常に強い。日本の場合、一般的にはこれまでほとんどそういうことを考えないでやってきましたね。本保 やつと変わってきたという感じですね。その意味で画期的だったのは、京都市の景観規制条例です。京都という一番たいへんそうところで、厳しい景観規

制をやりましたので、最近、ほかの都市でも、景観行政に力を入れてやっていかなければいけないという機運が高まっていますし、実際に景観条例をつくりつつあるところがいくつかあります。青木 それが町おこしとか、地域おこしに結びついてきます。観光庁ができたので、そういう面をもっとバックアップして、観光と文化を結びつけて、文化財や街並みの保存とか、文化的景観を守る・育てる、文化芸術創造都市を目指すとかいろいろなかたちでの発展と結びつけていける機運がようやく出てきたということですね。観光はその国の魅力の問題でもありますが、国際関係においても重要な役割をもっていると思います。スイスが永世中立でやっていけるのは、政治的な立場の表明だけでなく、そのすばらしい自然と文化の景観や、観光的な施策が官民行きとどいていて外国人を楽しく、また、うまく迎え入れる方針が徹底していることも重要な理由だと思っています。日本もこれから観光面での世界の国や地域との競争の中で生きていくときに、観光立国というのが、極端にいえば、日本へ行つてい

明治時代とか、江戸時代に来た外国人は、「非常に日本は美しい」と感嘆して帰っていったわけですが、その後、街並みが壊され、農村風景が壊されということ、ずいぶん悪くなつてしまった部分があると思います。青木 文化庁でも歴史的な町づくり支援や、文化芸術創造都市の表彰を行ったりしているのですが、国内でも、国外に対しても、地域の魅力はどのようなかたちですれば一番発揮できるとお考えでしょうか。本保 最近会った、旅館の再生を一所懸命やっていらっしゃる方の話が印象的でしたが、その方とはにかきたいへんだというんです。本来、旅館は、地域の特色や、個性のあることが一番大事であるのに、個性が破壊されてしまつて、どこへ行つてもミニ東京スタイル、ミニ由布院スタイルになつていて、味わいがどんどん失われていつている。そういう物まねのスタイルでことを展開するとは一時はうまくいくのですが、長い間には必ず飽きられて忘れられてしまう。そういうところを再生するのが本当にたいへんだと。また、全体的な傾向としては金太郎アメ

化が進む一方だ、ということを書いてるのです。

実はこれは、日本の街並み、文化的な形態にも当てはまることだと思ふのです。人の物まねで、本来地域に備わっている良さとか、個性とか、伝統とか、こういうものを失いつていつているところが、たぶん日本の一番の問題ではないかと思つています。私は、勝ち残りたかつたら、その地域の伝統とか、歴史とか、生活とか、これをきちんと表現した町づくりなり、地域づくりなりをすべきだ、それをやらなかつたら必ず負けるということも言っています。

青木 一種の画一的な景観をつくつてしまふというのが、日本の近代化とともに始まつてきたので、その中で失われたものもたくさんあるわけですね。

そうするとそれぞれの地域や場所の個性と魅力をいかに発揮するのかということが大事になってきますね。ヨーロッパを見ても、非常に古い街並みとか、あるいは自然の景観を維持するのに、ものすごい努力をしていますね。パリの旧市街ですと、自分のアパルトマンの窓の枠が壊れただけでも、その修理は持ち主



観光と文化

これまで世界各地を訪れてきた。

しかるに、観光をしたという記憶がまずない。当然のことながら、文化人類学の研究者として赴くのであるから、どこへ行つても観光をするという気がない。研究上はおもしろいのだが、実際、味気ない面も多い。他面、ある国や地域に調査に行つても、その社会や文化の理解において自分が調査する限られた部分だけでは理解できない面が多くあり、その国や社会の多くの部分や場所を実地に見ないことにはすまないことも多い。

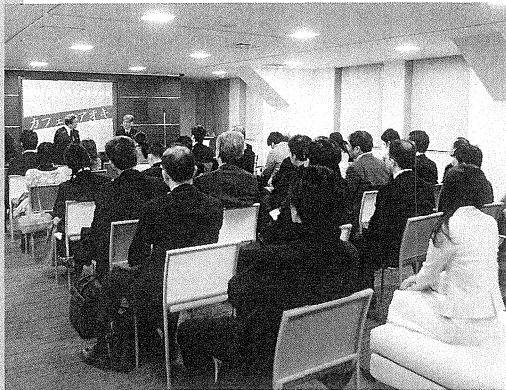
そうして訪れた場所にはなだたる観光地も含まれ、そこに行つたことが研究上の大きなモチーフを生むこともある。以前も書いたが、四〇年以上も前に訪れた北インドのダージリンで英植民地時代の遺産ともいえる観光リゾート地に滞在したが、アジアの近代化のもう一つの面と

もいえるリゾート開発とリゾート地の比較研究が大きな課題として出てきた。ダージリンから軽井沢までアジアを縦断する西洋植民地がつくりだしたリゾート地の歴史と現在の中に「近代と現代」の問題が存在する。アジア諸国はいまや観光立国的な方向での発展開発に国や地域を挙げて取り組んでいる。しかし、観光という行為が何を与え、観光地はどのようなになるべきなのか、その魅力はどうそれぞれ場所や地域で発揮すればいいのか、多くの問題が残っている。そこには「余暇・閑暇」「日常と非日常」「移動」などの問題をどのように位置づけるのかという今日の社会の大きな問題も存在する。観光産業を盛んにし観光収益を上げる経済効果に観光の奨励と目的を求めるだけでは、人間と社会にとつての観光の深い意味が見失われてしまう危険もある。観光庁では「観光は文化交流」とも言っているが、そこには観光と文化と人間をめぐる新しい関係と認識が生まれる可能性がある。文化庁からみても観光は大きな課題になる。二つの庁の一層の深い部分における連携と協力が日本の明日をかたちづくる大きな力になると思う。

います。これは教育の問題でもあるのではないかと思っています。

青木 自分が今まで住んできた世界とはまた違う経験ができるというような、未知のものに対する好奇心が重要だと思えますね。今の日本の教育の中でも、その方向がなかなか出てこない。好奇心・未知のもの、未知の土地への関心は進歩発展の基本だと思うのですが、科学技術の発展も大航海時代に始まる近代世界の発展も。今日、本保長官の話をお聞きしていると、文化人類学でさんざん書いたり言ったりしてきたことを、観光庁が全部取っていったという感じがする面もあるのですが（笑）、異文化理解、他者理解、他者の目で見ると、それが自分の発見、自分たちの評価・認識、地域も都会も国も、そこからさまざまなかたちでの発展と新しく展開が始まるといったこと、そういうことが観光という人間の移動のかたちの基本にあり、それが具体的な施策や方針、官民学などの協力、地域や町・国おこしにもつながってゆく。これはすばらしいことだと思います。

今はインターネットをとおして、世界各地の情報がすぐ入ってくる時代です。



もらったんです。彼はこの二年半ぐらい世界中を回っていて、賢いし、しっかりした考えをもっています。何で世界中を旅行して歩いているのですかと言ったら、結局、日本というものを見直すためには外からの目で見なければわからない。そういうことで、日本がわかるために、世界を旅行して歩いていると言っています。そういう経験をした人間の発信力です。そういう経験をした人間が発信力です。出かけて行って、いろいろ経験したり見たりしたほうがおもしろいよ」と発信してもらったのも一つの手段だと思っています。

青木 観光というのは、本保長官がおっしゃるように、他人を知り、また自分を知る、異文化を知り自文化を知る、一つの大きな経験なんですよ。それによって人間は成長していくという面があると思います。

そういう点で、文化庁と観光庁は、今でも政策的に協力しあっていますが、明日の日本のためにもこれからいろんな面でいっしょにやっているといる部分が本当に多くあると思います。どうかよろしくお願ひします。

(一)

常に良い思いをし、あそこは素晴らしい自然と社会と文化があり、親切であたたかい人たちのいるところだから、日本を攻撃したくないと国際社会で強く思われて、それが一種の安全保障につながるようになっていくかと思っています。そういう方向でも、観光の重要性そして文化の重要性がもっと強く認識されるべきでしょう。



異文化を知り、自文化を知る

青木 長官はこれまで外国勤務も長いし、いろいろなところへ行かれています。世界の観光地で、思い出に残っているとか、あそこはすごいというのはありますか。

本保 たぶん一番美しい都市がパリであることは間違いないと思います。パリには長い時間をかけてつくつてきた良さがあると思います。都市景観を大事にするという姿勢・政策の効果だと思います。

東京もパリに並ぶぐらい魅力的な都市ではないかと思っています。これだけの多様性をもっていて、いろいろな意味で奥深さをもっている。しかも、こんなに安全で安心な都市は、世界にどこにもないと思いますので、多くの外国人が東京を評価してくれていることは間違いないです。

青木 むしろ東京の人、日本人が東京にいろいろな潜在的な魅力があることを、必ずしもちゃんと意識していない、評価していないのではないかと思いますね。

本保 確かに何げなく眺めていると、慣れているから、何も特別なものがないという感じがしますけれども、外国人の目で見ると、全然違うわけです。そういった外から見たときの目のもち方がどうも我々は苦手なのではないかという気がします。

他方で、日本人ほど文化といっているぐらい、おもてなしの精神に富んでいる国民はまれではないかと私自身は思っています。ただし、精神に富んでいるということが、直ちにおもてなしにつながるとは思っていません。

シャネル・ジャポンの社長さんが、「おもてなしというのは心の豊かさを表現することです」とおっしゃっていました。日本人はその豊かさをもっていると思うのですが、相手に伝わる場所までいかないと、おもてなしにならない。そういうところをどうつくっていくのかということになると思うのです。

これを教育に結びつけていえば、他者とか世の中に対する関心の高さの問題と非常に深くかわっているのではないかと思います。もっと世の中に関心をもってもらうことが重要ではないかと思っています。

◆特集◆
平成二十一年度の文化行政の重点的な取組

【施策紹介】
平成二十一年度の文化庁重点的施策

◆文化庁ニュース◆
カフェ・アオキ 小淵優子さんをお迎えして

など

◆連載◆
【文化芸術の見どころ (仮)】
仏像の素材

【いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート】
財団法人安部兼四郎記念館

【こどもの文化体験】
本物の舞台芸術体験事業を終えて

【日本の伝統美と技を守る人々】
金春悠一(芸名 金春物左衛門)・能羅子方太鼓

【文化交流使の活動報告】
千 宗屋・茶道家

【伝建地区を見守る人々 伝建蔵時記】
竹原地区 (広島県竹原市)

など

文化庁月報 3月号 (通巻486)

平成21年3月25日印刷・発行

編集——文化庁

〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2

発行——株式会社 ぎょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12
本部 〒136-8575 東京都江東区新木場1-18-11
電話 編集 03-6892-6536
販売 03-6892-6666
フリーコール 0120-953-431
URL: http://www.gyousei.co.jp

印刷所——ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価 540 円 [本体 514 円] 送料 76 円

年間購読料 6,480 円

本誌のご購読の申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先
(株) ぎょうせい営業部首都圏課 (広告)
電話 03 (6892) 6588 (ダイヤルイン)
2009 Printed in Japan ISSN 0916-9849

本誌は本文に再生紙・大豆油インキを使用しております。

編集後記

法務省入国管理局の調査では、平成一九年末現在の都道府県別外国人登録者数が最も多かったのは東京都でしたが、二位は大阪府と入れ替わった愛知県でした。韓国・朝鮮籍の特別永住者が多い大阪府と、外国人労働者が多く集まる愛知県との順位が入れ替わったのです。

この当時、外国人労働者の日本語学習への動機付けはおおよそ低く、学習に対するインセンティブの付与が課題となっていました。ところが、アメリカに端を発した金融危機により、主に製造業に従事していた外国人労働者の仕事が減り始めると、新たな仕事に就くための日本語学習を希望する外国人が増え始めました。

文化審議会国語分科会では、仕事にかかわる内容も含め、日本に暮らす「生活者としての外国人」に対する日本語教育について検討を進めています。外国人とともに生きる時代において、外国人がどのような日本語を必要とするのか本誌で紹介した審議経過報告を切っ掛けに考えてみてはいかがでしょうか。

(A・N)

美術館・博物館チケットプレゼント

今月号の展覧会等へのチケットプレゼントは、

- A 国立西洋美術館
「ルーヴル美術館展」 2組 (ペア)
- B 東京国立近代美術館工芸館
「近代工芸の名品一花」 2組 (ペア)
- C 国立新美術館
「アーティスト・ファイル2009」 2組 (ペア)
- D 奈良文化財研究所飛鳥資料館
「キトラ古墳壁画四神」 2組 (ペア)
- E 東京国立博物館
「国宝 阿修羅展」 2組 (ペア)
- F 奈良国立博物館
「国宝 鑑真和上展」 2組 (ペア)

です。ご希望の方はアンケートハガキのチケット応募欄に必要事項をご記入のうえ、3月23日(月)までにご返函ください(当日消印有効)。

*チケット発送をもって当選発表にかえさせていただきます。

文化庁では、ホームページで、文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見、文化庁月報の感想などを、ホームページのご意見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●

<http://www.bunka.go.jp>